「世界広布の歌」の成り立ち

日蓮大聖人の御遺命である世界広宣流布。その第一歩は、第三代会長池田大作先生による海外指導の旅であった。

それは、1960年（昭和35年）10月２日、会長就任からわずか５ケ月後のことであった。誰もが世界広布の時代を待ち望んでいた。が、それは、遠い将来のことだと思っていた。会長就任の翌月、第２回本部幹部会で、池田先生の海外指導が発表された時、参加者はその勢いに驚いたという。（同年６月27日）

聖教新聞に「世界広布」の文字が初めて大きく載ったのは、10月の池田先生の海外出発の報道であった。

池田先生による世界広布の旅は、道なき道を拓く、苦闘の旅であった。

一人立つ師匠の戦いに呼応しようと、青年たちが決意を込めて作った歌が「世界広布の歌」である。

この曲は、63年（昭和38年）７月31日、東京の台東体育館で開催された男子部幹部会の席上、新男子部愛唱歌として発表された。

この年の年頭より、男子部首脳は、新しい時代にふさわしい愛唱歌を作ろうと歌詞を募っていた。そのなかに「世界広布の歌」と題された歌詞があった。群馬県太田市と栃木県足利市の男子部有志から届いたものだった。

彼らは「池田先生とともに、平和のために世界に羽ばたいていくような、気宇壮大な歌を作ろうじゃないか」と語り合い、一編の歌詞を作り上げた。このスケールの大きな歌詞を原案にして、男子部首脳たちは曲づくりにとりかかった。

折しも、池田先生が７月11日の男子部結成12周年を記念して、『大白蓮華』の巻頭言に、「青年よ世界の指導者たれ」を執筆。新時代を開く青年部を激励した。

「新しき青年部は、さらに世界的視野に立ち、幅広く立体的な活動を展開し、各界において有意なる人材、一流の指導者として巣立ちいかねばならない」

世界の指導者たれ、との師匠の激励に応えようと、さらに検討が重ねられ、発表の日を迎えたのであった。

「私たちが想像もできなかった“世界広布の時代”がきた。そこで、世界広布の心を全国の隅々にまで伝えようと男子部の皆で検討しながら、曲づくりがはじまったのです」

作曲を担当した有島重武さんは、そう振り返る。

現在ほどメディアが発達していなかった当時、広布の進展や池田先生の息吹を伝えるために、学会歌の果たした役割は大きかった。

「世界広布の歌」も、新たな時代を象徴する歌として、全国の同志の心を鼓舞した。

世界の人びとを幸福に導きたい――その思いを胸に、世界に雄飛した広布の先人たち。その激闘によって、いまやＳＧＩは、世界180カ国・地域にまで広がった。

“世界広布の鐘”は21世紀の大空に、いよいよ大きく、さらに力強く鳴り響いている。